

第18回 教育課程企画特別部会（平成28年7月11日）における 主な御意見

■. 新しい時代と社会に開かれた教育課程

- 「論点整理」を出した時と比べ、世の中がまた一気に変わってきている。情報化やグローバル化といていたところに、人工知能が大きく取り上げられるようになり、世界情勢の変化もあった。「審議のまとめ」が世に出されるときには、さらに状況が変化している可能性がある。そういう意味で、冒頭の書きぶりが非常に重要であり、規範を守り、ルールを守りながら、いろんな人と倫理的に関わっていく、かつ自由に生きていくことを打ち出していくことが必要ではないか。
- 第四次産業革命や人工知能といった話があるが、そうなってくると、それが一体何なのか、なぜ職業がなくなるのか、社会構造はどうなっていくのかといったことを学ぶ必要が出てくる。例えば、教科・科目で考えるならば、情報や産業教育の中の工業で学ぶことになるのだろうが、そうした冒頭部分の変化を受けて、実際に何を学ぶ必要があるのかも変わってくる。

■. 育成すべき資質・能力について ～何ができるようになるか～

- 幼児教育の10の姿と、小学校段階以降の資質・能力の三つの柱について、全体を通して見ていくと、人間像の根幹に関わるものから生活の各側面に沿って日常生活の中で求められているようなものまで、様々なレベルが混在しているように見える。これを少し交通整理する必要があるのではないか。例えば、幼児教育の10の姿を視点として交通整理することもできるし、資質能力の三つの柱が根幹にあって、ここからの関連性の中にこの10の姿があるという整理の仕方もある。そうした全体像を示すことで、読みやすくなるのではないか。
- 幼児教育部会のまとめについては、幼児教育は教科等に分かれていないことから、まず見方・考え方を1つ提示してある。それを子供の側の育成すべき資質・能力に落とし込むと、3つの柱があり、これが小学校以降と共通するものとして、幼児教育にふさわしい言い方に言い換えながら3つの柱を立てている。その上で、それを実現させるためには具体的な教育活動が必要となる。それが幼児教育における5領域であり、その上で、幼児教育全体を通して、特に幼児教育の終わりの段階までに、5領域の中で子供たちが身に付けていく内容、重点的な項目を10項目に整理をした。さらに、その10項目に整理した上で、子供たちはどのように学んでいくのかという学習過程があり、その過程をしっかりとしたものとするために、小学校以上と同様に、主体的、対話的で深い学びを実現していくという流れになっている。すなわち、幼児教育から小学校教育につながる部分の中心は、資質・能力の3つの柱であり、それを具体化したものが10の項目となると整理できる。
- 今回の改訂は、各教科の特質に基づくものの見方・考え方を整理し、その教科の知識を単に学ぶのではなく、その教科を足場としつつ、教科を超えた思考・判断・表現や問題解決を支えていく点に教科の新たな学力的な意味を見出していこうという取組。

見方・考え方を一覧にして眺めてみると、例えば「比較」、「関連付け」「時間的・空間的」というように、様々な教科で似た言葉が出てくる。教育課程全体で見通した場合、子供は「比較」を様々な教科で経験し、その教科によって比較の様相やポイントは違っているが、子供たちは結局、社会に出て問題解決に取り組む際に、これは社会科的比較でいくべきか、理科的比較でいくべきかが分からない状況で比較を使うことになるのであり、それを自在に使えるようにしなければならない。それぞれの教科の対象に対して多様に行われていく比較や読み解き方や議論など見方・考え方が、教育課程全体で鳥瞰的に整理され、子供の中で統合されて道具化するところまで進めていく必要がある。教科で見方・考え方が出そろって、これからは教科の内部論理に向かい、どんな内容を編成して、どんな方針でという話になっていく今の段階で、もう一度各教科等を見方・考え方を見比べ、それぞれの比較の中で、この教科では特にこういう特質で、こういう攻め方でやりますよねといったことを相互に確認し合い、あるいは、全体として統合するような議論が必要。それが実際の教科の内容編成に入った際に、実は各教科の内容も、よりはっきりさせることにも結果的になる。

■ 各教科等を学ぶ意義と教科等横断的な視点を踏まえた教育課程の編成 ～何を学ぶか～

- 総則の中で指導計画の作成に関する重要な記述がなされているが、その具体的なものとして、E S D、持続可能な開発のための教育を挙げると良いのではないか。日本でも1,000校前後加盟しており、全世界で1万校前後がゆるやかに連携しながらエネルギー学習や環境学習、防災学習を中心としてアクティブなプログラムを作っている。元々は日本政府が世界に対して提唱したプログラムであり、国内だけでなく世界の教育をグローバルな視点から捉えることにつながるものなので、ぜひ加えると良い。
- プログラミング教育については、今回の報告書の考え方は非常に良いが、気になるのが「プログラミング的思考」が何を指しているのか。最近では、コンピューター自信がかなり学習機能を持っており、プログラミングは原理的なところでは確かに学習するアルゴリズムを持っているが、学習した結果、どういうことを人工知能が行うのか、プログラマーも意図していなかったことまでできてしまう。いわゆるアルゴリズム的思考も、原理的には学習のアルゴリズムについてはあるが、70年代のように言われたことを忠実にやるというイメージだけを持っていると、今の人工知能とギャップが生じてしまう。小学校段階ではとりあえずアルゴリズム的思考ということで良いのだろうが、中学校、高等学校段階となると、最近の人工知能が持っている方式やそれによって生じることなどについてもスムーズに取り入れていかなければならない。
- プログラミングを教える方向に傾いた際に心配なのは、縦割りで、単体で教えることとなりコンテキストがなくなってしまうということ。英語教育もそうだが、ICTを独自で教えるということよりは、ICTをどうほかの授業で使っていくかがポイント。プログラミングでコンピューターをプログラムするというよりは、コンピューターにいつか使われるのではなく、どうこれから使い続けるのかという考え方をぜひ取り入れて欲しい。

- 各教科等のワーキンググループの議論を見る中で、他の教科との関連がどのように意識されているのか、自らの教科はどういう存在であり得るのかという視点が充実する必要があるのではないかと。各教科が改めて学習指導要領という形でより具体化されていく際に、他の教科との関連という視点を失ってしまうと、今回の改訂の意義が損なわれてしまう。

■. 各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実 ～ どのように学ぶか～

- 「アクティブ・ラーニング」という言葉が出てきて、逆にアクティブ・ラーニングとはこういう型だという論者や、そうした書籍も出てきて、現場でもアクティブ・ラーニングとはこういう型の授業なのだという型にばかりとらわれ、ある意味、「論点整理」でまとめ趣旨に反する状況が生じている部分があった。むしろ、アクティブ・ラーニングの本質的な特徴である、「主体的・対話的で深い学び」を目指すことがアクティブ・ラーニングの視点であって、それを捉えていれば何か特定の型にとられることはないのだということを示すため「アクティブ・ラーニングの視点」と表現することに意義がある。

■. 児童生徒の発達を踏まえた指導 ～子供の発達をどのように支援するか～

- 審議のまとめの構成のうち、2ポツ（5）の部分について、特別支援教育の充実がキャリア教育の下になるのは再考すべき。学習活動や学校生活の基盤作り、これに特別支援教育はかなり関わってくるので、順番を入れ替えた方がよいのではないかと。特に今回、高等学校で通級による指導が導入され、高等学校においても学級指導の中で支援教育を行っていかねばいけない。
- 特別支援というと、これまでも1つ別の柱が必要だった。しかし、インクルーシブ教育制度というのは、すべての教科、すべての学校種に入ってくるもの。クラスの中で気になる子だけが対象なのではなく、学習プロセスや発達特性を踏まえた指導が特別支援を含む形で行われますよという書きぶりができないか。

■. 学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策 ～実施するために何が必要か～

- 小学校、中学校の連携について、外国語教育の指導を担当する教員の研修については具体的に述べられているが、これは外国語に限らず、小学校と中学校の教員と一緒に研修をしたり、場合によっては互いに指導し合ったりということが記述されていると、学校種間の連携が明確になるのではないかと。
- 従来、高校の現場では、日本史と世界史を担当する教員がそれぞれ異なっていた。今回、両者を統合した新科目を必修とした場合、誰がそれを教えることができるのかという問題が生じる。また、地理総合もGISなどコンピューターを使って地理情報を整理していく新しいスキルとなる。こうした状況に対応するためにも、教員の研修や

教職課程の充実が求められる。

- プログラミング教育を推進していくためには、ICT環境の充実が必要。これ以上のスペックのパソコンを持ってきなさい、なければ政府が貸与しますというぐらいの姿勢で臨まなければならない。
- 学校現場では、分かっていない管理職に邪魔をされるということが多い。教員改革の部分に、教員改革及び校長改革（校長のマネジメント力、リーダーシップ力の資質・能力を上げるための改革）」など、校長改革について記述をして欲しい。
- 学習指導要領の実現のためには条件整備が重要であるというのは常にテーマであり続けている。その意味で、この部分のみにすべての条件整備を集めるだけでなく、この部分でしっかりと書き込むと同時に、それぞれの部分で、必要となる条件整備について折々に触れながら記述をし、それを2（7）の部分で受けるという構成をする必要がある。
- 肝心なのは教員の意識改革。「アクティブ・ラーニングの視点」からの授業改善が求められている中、1人で部屋にこもって本を読み、過去の事例を調べて指導計画を立てるのではなく、主体的・対話的で深い学びが実現できるよう、特に教員も対話を重視していく必要がある。そうした教員の意識改革についても触れていただきたい。

■. 各学校段階の教育課程の基本的な枠組みと、学校段階間の接続

- 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿が明確に示されたことで、これまでイメージの持ちにくかった保育園や幼稚園でどのような教育が行われ、子供たちにどのような力が付いて小学校に上がってきているかが捉えやすくなった。小学校として、入学への準備ができ、子供たちのイメージが持ちやすくなり、スタートカリキュラムを進めるに当たっても大変参考になる。ぜひ小学校教員の目に付きやすい形で、示す工夫をしていただきたい。
- 小学校は低中高6年間と非常に幅があり、それぞれの期間に課題や特色が有る。その中で細やかに子供たちが発達をしていくということが明文化されることが、幼児教育との接続や、高学年と中学校との接続つながっていく。こうしたことが、総則やそのほか、一般にも伝わりやすい形で示されると良い。
- 幼児教育の10の姿が明確化されたことは非常に良いが、次は小学校教育がこの10の姿を具体的にどう受け取るのかが記述されると良い。今回の学習指導要領改訂の議論がスタートしたとき、学校種間の連携が大きなテーマだった。1つ1つ具体的に対応した記述を考えるのは難しいと思うので、例えば、「小学校教育の基本と低中高学年、それぞれの課題」の最初の部分に、幼児教育で培われてきた10の姿をどう受け取り、それをどう尊重しながら、どう伸ばしていくのかということをも明言すると良い。
- 小中高、それぞれの部分についてはしっかりと書かれているが、共通する学校間の接続や連携については、各学校段階の部分で書くのではなく、全体として記述することも検討してはどうか。
- 日本の大学が世界ランキング等で順位が下がっているとよくマスコミ等でも報道されている。日本語という言語の問題もあるが、大学入学者選抜において、グローバルな

視点は当然必要。日本の大学が世界の中でガラパゴス化されないためにグローバルな視点が必要であり、ボローニャ・プロセス等を十分考慮する必要があるといった記述を入れていただきたい。

■. 各教科・科目等の内容の見直し

- これまで高等学校における歴史教育は古代から現代まで通史的に教えていくことが一般的だったが、今回の歴史総合では近代化と大衆化とグローバル化という近現代の重要なテーマを設定し、それを歴史的に教えていくというような非常に新しいアプローチ。ただし、近現代の特徴が果たして、近代化、大衆化、グローバル化という三つのキーワードだけで特徴付けられるかどうか自体も議論があるところであり、また、欧米社会が主導して発生したような傾向があるので、どうしても歴史の記述として、欧米中心という印象を与えかねない面がある。「取り上げることが考えられる題材」についても、日本と、どっちかというとなら欧米で始まった題材が並んでいるが、近代化を論ずるときにはアジアの例もある。そうした例示も加えた方が良いのではないかな。
- 歴史総合は授業時間の限りもあるので近代化に集中するのもやむを得ないが、現代社会の特徴を説明するときに、背景として前近代の社会の説明を同時にした方がより理解が深まると考えられる。例えば、近代化を説明する際には、前近代社会には身分制度があり、それが否定されて、近代の法の下での平等な社会が生まれてくるという説明になる。大衆化、グローバル化も含め、3本柱のキーワードの説明に入る前に、若干でも前近代の説明を加えていただいた方が分かりやすいのではないかな。
- 英語と日本語の音の構造の違いを意識し、音の意識を小学校段階から身に付けていかなければならない。ただフォニックスをやっても、音の意識がない子供には難しい。それを意識した書きぶりにしていただきたい。